

# 高齢の大腿骨骨折患者への支援に関する一考察

—患者の性別に着目した医療ソーシャルワーカーの支援の特徴—

ハタ カオリ  
畑 香理\*

**目的** 大腿骨骨折患者への指導や支援等に関する先行研究は医学的な観点から行われることが多く、ソーシャルワーカーによる退院前後の生活支援に着目した研究はほとんどみられない。そこで本研究では、医療ソーシャルワーカー（以下、MSW）による大腿骨骨折患者への支援内容を分析し、退院後の在宅生活を支える方法を明らかにしていきたい。また、先行研究では日常生活における活動や役割において性別による違いが認められていることから、本研究では患者の在宅復帰を支援する際に、性別による日常生活上の活動や役割の違いが支援の内容や量に影響を与えるかどうかについても検討していきたい。

**方法** 全国の回復期リハビリテーション病棟を有する医療施設で、2018年8～9月にかけて当該病棟を担当しているMSWを対象者とした。質問紙にて、①調査対象者の属性、②これまでに担当した大腿骨骨折患者のうち高齢入院患者の状況、③大腿骨骨折の高齢入院患者への支援内容、④業務全体の実施状況について質問を行った。調査票は1,181カ所の医療施設へ郵送し、有効回答の339名を分析対象とした。

**結果** 大腿骨骨折患者の支援では、高齢男性患者よりも高齢女性患者に対し、以下の項目がより多く行われていた。具体的に「家事全般（炊事・洗濯・掃除等）」「屋外活動（散歩・買い物や受診時の移送・庭仕事等）」「受傷前の家事役割維持」に関するサービスや支援の導入・調整、「再転倒の不安・恐怖の訴え」「家庭内で担っていた役割を果たせないもどかしさや情けなさ、同居家族への気遣いや気兼ね」「痛みや疲労感の訴え」などを傾聴し受けとめる、「生活の中で楽しみ・趣味活動を見つける手助け」「社会活動参加（近隣住民や町内会との交わり）の維持」に関する支援である。一方、患者の性別によって支援状況の違いが見られなかった主な項目は、社会資源や制度に関する情報提供や活用の仲介等があった。

**結論** 大腿骨骨折患者に対してMSWが行う支援の量は、患者の性別によって異なることが明らかになった。さらに、患者の性別の違いによって支援に差が生じる背景として、患者が入手するソーシャル・サポートの違いが関係していると考えられる。MSWは、これまで入手できていたソーシャル・サポートが骨折のため入手しづらくなった高齢女性患者に対し、その代替となるサービス導入・調整やさらなる充実という視点で支援を行っていると考えられる。

**キーワード** 大腿骨骨折、高齢患者、医療ソーシャルワーカー、性別、ソーシャル・サポート

## I 緒 言

高齢化が進展する日本では、大腿骨骨折患者

の発生数が増加しており<sup>1)</sup>、骨折後の高齢者はADLやQOLの低下を引き起こすといわれている<sup>2)</sup>。これまで日本では、大腿骨骨折を呈した高齢患者のADLおよびQOL低下に係る要因の究明や身体機能等の低下を防止するための指導

\* 福岡県立大学人間社会学部助教

等に関して、様々な研究が行われてきた<sup>3)-6)</sup>。なかでも七田らは、大腿骨骨折既往者は一般の高齢者に比べて生命予後はほとんど変わらないものの、移動能力や日常生活動作が著しく低下することを明らかにしたうえで、患者や介護者への退院時指導とともに、退院後の生活へのケアが重要であること<sup>3)</sup>を早くから指摘していた。そしてその後、医師やセラピスト、看護職が医学的な観点から大腿骨骨折患者に対して行う指導等の研究が数多く公表されてきた。一方で、大腿骨骨折患者に対してソーシャルワーカーが行う退院前後の生活支援に関する研究はいまだに少ない。つまり、大腿骨骨折患者の研究は身体的側面への医学的な指導に焦点が置かれ、退院後の暮らしの営みを視野に入れた生活支援にはあまり注目されてこなかったといえる。そこで本研究では、医療ソーシャルワーカー（以下、MSW）による大腿骨骨折患者への支援内容に着目することで、受傷後の在宅生活を安心して営めるようにするための支援方法を検討していきたい。

日常生活における活動や役割に関しては、性別による違いが認められることが先行研究<sup>7)-9)</sup>で指摘されており、このことを踏まえると、高齢の大腿骨骨折患者が退院後の生活で担う役割や活動にも性別による違いが表れると考えられ、それゆえMSWによる支援の内容にも性別によって差が生じると推測できる。そこで、大腿骨骨折を経験した高齢入院患者への支援については、患者の性別により違いが表れるという仮説のもと、実態調査を通じてその実施状況を明らかにすることを目的とする。さらに調査結果から、性別によって支援に差が生じた背景や要因についても考察していきたい。それにより、大腿骨骨折の入院治療を終えて退院した高齢者が円滑に在宅生活をスタートさせ、安定した日常生活を営むことができるように支援する方法を実態に即して検討することができると思われる。

## Ⅱ 方 法

### (1) 対象者と調査方法

2018年8月から9月にかけて、全国の回復期リハビリテーション病棟を有する医療施設を対象としたアンケート調査を実施した。調査対象者は1施設につき1名とし、回復期リハビリテーション病棟を担当しているMSWに回答を求めた。本調査は、無記名自記式質問紙調査であり、調査票は郵送にて配布・回収した。なお、調査対象の選定にあたっては、一般社団法人回復期リハビリテーション病棟協会が公開している会員病棟情報<sup>10)</sup>を参考にした。

### (2) 調査項目

調査項目は、①調査対象者の属性、②これまでに担当した大腿骨骨折患者のうち高齢入院患者（65歳以上）の状況、③大腿骨骨折の高齢入院患者への支援内容、④業務全体の実施状況の4項目とした。具体的に、①調査対象者の属性に関する項目では、性別、年齢、経験年数、取得資格、所属する医療施設と所属部署、大腿骨骨折患者の担当数について回答を求めた。②これまでに担当した大腿骨骨折患者のうち高齢入院患者の状況に関する項目では、患者の年齢層、世帯状況、退院時に導入する介護サービス、既往歴について尋ねた。③大腿骨骨折の高齢入院患者への支援内容に関する項目では、MSWが入院中に高齢入院患者のうち大腿骨骨折患者に対して行っている支援について、患者の性別による支援状況を質問した。設問については、先行研究<sup>4)-11)-13)</sup>を基に作成した19項目について、「1：ほとんど実施しない（0～20%）」「2：ときどき実施する（21～40%）」「3：しばしば実施する（41～60%）」「4：わりと実施する（61～80%）」「5：よく実施する（81～100%）」の5件法で回答を求めた。④業務全体の実施状況に関する項目では、MSWの業務指針<sup>14)</sup>は、1)療養中の心理的・社会的問題の解決、調整援助、2)退院援助、3)社会復帰援助、4)受診・受療援

助、5) 経済的問題の解決、調整援助、6) 地域活動の6項目に分類されており<sup>14)</sup>、高齢入院患者のうち「大腿骨骨折」「脳血管疾患」「廃用症候群」の患者それぞれへの実施状況を質問した。このうち、本稿では主に③について取り上げる。なお、①②④については畑が考察しており<sup>15)</sup>、③のうち回答者の属性と経験年数の違いによる支援状況の差は畑が考察している<sup>16)</sup>。

### (3) 分析方法

大腿骨骨折の高齢入院患者への支援について、患者の性別による支援状況の差を調べるため、対応のあるt検定を行った。統計的検定の有意水準は5%未満 ( $p < 0.05$ ) とした。

### (4) 倫理的配慮

調査対象者へは、調査票発送の際、説明書(研究目的および方法、回収データの取り扱い方法、個人情報における守秘義務の遵守等を記載した文書)を添付し、同意を得られた場合には無記名での回答とし、返送を依頼した。なお、本調査は福岡県立大学研究倫理部会の審査・承認後、実施した(承認日:2018年7月19日、承認番号:H30-10)。

## Ⅲ 結 果

送付数は1,181カ所で、345名から回収し、回収率は29.2%であった。このうち、本研究の調査上、必要な回答項目において未回答であった6名を除外した339名を分析対象とした。分析対象者339名のうち、男性は97名(28.6%)、女性は242名(71.4%)であった。対象者がこれまでに担当したことのある65歳以上の大腿骨骨折患者の特徴として、患者の年齢層については、80歳以上85歳未満が152名(44.8%)、85歳以上90歳未満が115名(33.9%)と80歳代の患者が約8割を占めていた。また、患者の世帯構成については、配偶者と二人暮らしである患者を担当したことが多いという回答が143名(42.2%)と最多であった(表1)。

さらに、対象者が行っている支援のうち、65

表1 対象者の概要 (n=339)

	人数	割合(%)
対象者(MSW)の性別		
男性	97	28.6
女性	242	71.4
担当患者の年齢		
65歳以上70歳未満	0	0
70歳以上75歳未満	6	1.8
75歳以上80歳未満	36	10.6
80歳以上85歳未満	152	44.8
85歳以上90歳未満	115	33.9
90歳以上95歳未満	14	4.1
95歳以上	6	1.8
無回答	10	2.9
担当患者の世帯状況		
単身	75	22.1
夫婦二人	143	42.2
本人+子	43	12.7
夫婦二人+子	44	13.0
夫婦二人+子+孫	6	1.8
本人+子+孫	2	0.6
その他	7	2.1
無回答	19	5.6

歳以上の大腿骨骨折患者における入院中の支援実施状況について回答を求めた。患者の性別による支援の実施状況の差異を検討したところ、「③家事全般(炊事・洗濯・掃除等)のサービスや支援の導入・調整」「⑦退院後の屋外活動(散歩・買い物や受診時の移送・庭仕事等)に関するサービスや支援の導入・調整」「⑨再転倒の不安・恐怖の訴えを受けとめる」「⑫受傷前の家事役割を維持するためにサービスや支援を導入・調整する」「⑬家庭内で担っていた役割を果たせないもどかしさや情けなさ、同居家族への気遣いや気兼ねなどの想いを傾聴する」「⑭痛みや疲労感の訴えを受けとめる」「⑮生活の中で楽しみ・趣味活動を見つける手助け」「⑰これまでの社会活動参加(近隣住民や町内会との交わり)の維持に配慮した支援」の8項目で違いがみられた。いずれの項目もMSWが行う支援は、高齢男性患者に比べ高齢女性患者に対して多く行われていた(表2)。

患者の性別によって支援状況に違いが認められなかった項目の内容としては、社会資源や制度に関する情報提供や活用の仲介、退院後の身辺動作(移動・入浴・トイレ等)に関するサービスの導入とその調整、家屋環境を含む生活環境の物理的整備、歩行生活で生じる不自由さの説明、疾病受容の促進、同居家族による家事協

表2 大腿骨骨折の高齢入院患者の男女別における支援状況の比較(差)(n=339)

	女性患者		男性患者		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
①社会資源や制度に関する情報提供および説明	4.6	0.7	4.6	0.7	1.9
②社会資源活用への仲介	4.4	0.8	4.4	0.9	1.8
③家事全般(炊事・洗濯・掃除等)のサービスや支援の導入・調整	3.4	1.1	3.3	1.2	3.1**
④退院後の身辺動作(移動・入浴・トイレ等)に関するサービスや支援の導入・調整	3.9	1.1	3.9	1.1	0.6
⑤退院後の生活に必要な道具の準備	4.0	1.2	4.0	1.2	1.3
⑥家屋環境整備(障害物の撤去や手すり設置等)	4.0	1.1	4.0	1.2	1.5
⑦退院後の屋外活動(散歩・買い物や受診時の移送・庭仕事等)に関するサービスや支援の導入・調整	3.0	1.3	3.0	1.3	2.1*
⑧物的介助(つえ等)による歩行生活で生じる不自由さの説明	2.2	1.3	2.2	1.3	0.3
⑨再転倒の不安・恐怖の訴えを受けとめる	2.9	1.3	2.8	1.3	5.6***
⑩疾病受容を促す	2.6	1.2	2.6	1.2	-1.6
⑪同居家族による家事協力をとりつける	3.3	1.1	3.3	1.2	1.6
⑫受傷前の家事役割を維持するためにサービスや支援を導入・調整する	3.6	1.1	3.4	1.2	7.1***
⑬家庭内で担っていた役割を果たせないもどかしさや情けなさ、同居家族への気遣いや気兼ねなどの想いを傾聴する	3.5	1.1	3.1	1.2	9.0***
⑭痛みや疲労感の訴えを受けとめる	3.1	1.2	3.0	1.2	2.4*
⑮生活の中で楽しみ・趣味活動を見つける手助け	2.6	1.2	2.5	1.1	4.2***
⑯生活様式のこだわり(量の生活へのこだわり、自分らしい生活の回復)に配慮した支援	3.2	1.2	3.2	1.2	-1.5
⑰これまでの社会活動参加(近隣住民や町内会との交わり)の維持に配慮した支援	2.9	1.2	2.9	1.2	2.1*
⑱転院先・入所施設選定	3.9	1.2	3.9	1.2	0.0
⑲経済的問題への支援	3.3	1.3	3.4	1.3	-1.4

注 1) \*p<0.05, \*\*p<0.01, \*\*\*p<0.001. 未回答の項目は分析から除いた。

力のとりつけ、生活様式のこだわり(量の生活へのこだわりや自分らしい生活の回復)に配慮した支援、転院先や入所施設選定、経済的問題への支援があった。

## IV 考 察

### (1) 患者の性別における支援の差とソーシャル・サポートとの関係

本研究は、大腿骨骨折を呈した65歳以上の高齢入院患者に対する支援のうち、特に患者の性別による支援の違いと、その違いが生じる背景や要因を考察するため、MSWが行う支援の実施状況を基に検討を行った。その結果、以下の2点が明らかになった。

第一に、これまで大腿骨骨折を経験した高齢入院患者へのMSWによる支援では、患者の性別によって支援の違いがあることを明らかにした研究は見受けられなかったが、本研究は大腿骨骨折を経験した高齢入院患者の性別によってMSWの支援に差があることを明らかにし、新たな知見を得ることができた(表2)。つまり、大腿骨骨折を経験した高齢入院患者への支援を検討する際には、性別に留意するという視点が

重要であることがわかった。

第二に、患者の性別によってMSWの支援に差が生じる背景として、患者が入手するソーシャル・サポートの割合における男女差が関係していると考えられる。野辺<sup>17)</sup>によると、夫婦のみで暮らす世帯の高齢者にとって、生活上のサポートを受けるうえで配偶者と親族の存在は最も重要になる。さらに、高齢男性は高齢女性に比べて配偶者や職場仲間からサポートをより得られるのに対し、高齢女性は親族や近隣者からサポートを得られやすいという傾向が明らかになっている。特に、配偶者から「入院時の世話」をしてもらえるという点においては、高齢男性と高齢女性ではその割合に大きな差が認められ、高齢男性にとって配偶者の存在が重要なソーシャル・サポートとなっていた<sup>17)</sup>。つまり、高齢男性は骨折によってADLが低下しても、生活上必要となるサポートを骨折以前と変わらず配偶者から得ることができ一方で、高齢女性は骨折によってADLが低下すると親族や近隣者とのかかわりが骨折以前より減少し、それまで得ていたソーシャル・サポートが入手できなくなる。このように、日常的なソーシャル・サポートが大腿骨骨折による入院で入手できな

くなった、あるいは退院後の生活では受傷前のようにソーシャル・サポートを受けづらいことが予想されることにより、その代替となるサービスの導入・調整や支援の実施をMSWが担っていると考えられるのである。

## (2) 大腿骨骨折を経験した高齢入院患者への支援における3つの特徴

大腿骨骨折患者の在宅生活に向けた支援内容について、性別の違いに着目すると3つの特徴が明らかになる。

まず、高齢女性の大腿骨骨折患者には家事に関するサービスや支援の導入と調整がより重要になるという点である。平成28年社会生活基本調査<sup>18)</sup>によると、65歳以上の高齢者では家事に従事する時間が男性では36分、女性では2時間52分と男女間で大きな開きがある。また、日本の近代家族を特徴づけるような性別役割分業は高度経済成長期に定着し、男性は仕事をし、女性は家庭で家事や育児に専念するという分業が確立してきた<sup>18)</sup>。その後、共働き世帯が増加したが、男性は仕事、女性は家庭と仕事といった新たな男女の役割分業へと変化してきた<sup>19)20)</sup>。このように性別による役割分業が定着してきたなかで、これまでの人生を歩んできた高齢者への支援を検討する際、大腿骨骨折の影響によってADLおよびQOL低下を引き起こし在宅生活に支障をきたすような場合は、とくに家事役割を担う高齢女性の抱える課題に着目して支援内容を検討する必要がある。本研究においては、質問項目のうち、「③家事全般（炊事・洗濯・掃除等）のサービスや支援の導入・調整」「⑦退院後の屋外活動（散歩・買い物や受診時の移送・庭仕事等）に関するサービスや支援の導入・調整」「⑫受傷前の家事役割を維持するためにサービスや支援を導入・調整する」の3つの家事関連項目において、男性より女性の高齢入院患者の方がMSWの支援が行われていることが明らかになった。

つぎに、情緒的な側面への支援に関して、特に高齢女性の大腿骨骨折患者への支援が重要になるという点である。本研究の質問項目のうち、

「⑨再転倒の不安・恐怖の訴えを受けとめる」「⑬家庭内で担っていた役割を果たせないもどかしさや情けなさ、同居家族への気遣いや気兼ねなどの想いを傾聴する」「⑭痛みや疲労感の訴えを受けとめる」といった情緒的側面への支援は高齢男性に比べ、高齢女性の大腿骨骨折患者により多く行われていた。ソーシャル・サポートにおける先行研究では、情緒的側面へのサポートの入手において高齢男性では配偶者が、高齢女性では親族や配偶者に加えて、近隣者が重要なサポート源となっている<sup>17)</sup>。したがって、情緒的側面へのサポートは、高齢男性は家庭内で得られやすいが、高齢女性は家庭外の場面で得られやすいと考えられる。一般的に、患者は入院によって日常生活上の制限や身体的な不自由さから起こる活動制限等を経験するが、それらを考慮すると家庭外の間人関係は家庭内のそれより維持しにくいいため、とりわけ高齢女性ではサポートを入手しづらい状況に置かれることになる。以上のことから、高齢女性の大腿骨骨折患者が入院すると、高齢男性に比べてこれまで獲得していた情緒的側面へのサポートが得られにくくなるため、患者の性別によってMSWの支援に差が生じると考える。すなわち、MSWは高齢女性に対して情緒的側面へのサポートに留意する必要がある。

最後に、退院後の生活を見据え、趣味活動や社会との交流に関する支援を行う際は、高齢女性が受傷前に構築していた社会関係に着目することが重要になるという点である。先行研究では、高齢者をサポートする存在として配偶者と親族は重要であるが、「交遊」においては友人が重要な役割を果たすとされている。加えて、高齢女性は高齢男性よりも多くの近隣関係を組織していることが明らかになっている<sup>17)</sup>。このことから、多くの高齢者は社会活動等で交わりを持つ相手として友人の存在が重要であり、とくに高齢女性は日頃から近隣者との関係からソーシャル・サポートを入手し、生活を営んでいると考えられる。本研究では、「⑮生活の中で楽しみ・趣味活動を見つける手助け」「⑰これまでの社会活動参加（近隣住民や町内会との

交わり)の維持に配慮した支援」の項目でMSWが行う支援に性別による差があった。つまり、高齢女性患者が退院後に在宅生活を送るうえで、友人や近隣者からソーシャル・サポートを得ることは重要であり、そうしたニーズをMSWがキャッチして支援していることがわかる。すなわち、高齢女性には、より外出や社会参加の機会を確保できるよう支援することが重要となる。

以上3つの特徴から、高齢の大腿骨骨折患者では性別によって受傷前に得てきたソーシャル・サポートが異なるため、MSWによる支援の量に差が生じていることが明らかとなった。また、退院後の在宅生活を見据えた支援の視点として、高齢者の場合、性別に着目することによって必要な支援が見極めやすくなることがわかった。

## V 結 語

本研究では、大腿骨骨折を経験した高齢入院患者に対するMSWの支援において、患者の性別によって支援の量に差が生じるという仮説のもと、一定の検証結果が得られた。また、安心して在宅生活を営めるようにするための支援方法として、受傷前の生活を支えていたソーシャル・サポートの回復や代替、さらなる充実という視点で支援内容を考えることが、本人らしい在宅復帰を実現することが示唆された。

## 謝辞

本研究の趣旨をご理解くださり、調査にご協力いただいた回復期リハビリテーション病棟担当のMSWの皆さまに、この場をお借りし、心より御礼申し上げます。

本研究は、平成28年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)若手研究(B)(課題番号:16K17270)による研究の一部である。

## 文 献

- 1) 八重樫由美. 日本の大腿骨近位部骨折発生率－2012年における新発生患者の推定と25年間の推移－. 骨粗鬆症財団ニュース 2015; 26: 1.
- 2) 遠藤直人編. 大腿骨近位部骨折ゼロを目指す治療・予防戦略～多職種連携による取り組み～. 大阪: 医薬ジャーナル社 2015: 19.
- 3) 七田恵子, 遠藤千恵子, 柴崎公子, 他. 大腿骨頸部骨折患者の追跡調査－生存率と身体的活動性－. 日本老年医学会雑誌 1988; 25(6): 563-8.
- 4) 山本恵子. 高齢者の骨折が生活に及ぼす影響－転倒による大腿骨頸部骨折患者を例として－. 茨城県立医療大学紀要 1996; 1: 55-64.
- 5) 征矢野あや子, 太田勝正, 麻原きよみ, 他. 大腿骨骨折を経験した高齢者と家族の関わりを中心とした退院指導についての考察. 老年看護学 1998: 35-42.
- 6) 山口奈都世, 橋本麻由里. 大腿骨近位部骨折術後患者の早期ADL自立に向けた看護ケアの指標作成とその評価. 岐阜県立看護大学紀要 2015: 55-65.
- 7) 山田昌弘. 近代家族のゆくえ－家族の愛情のパラドックス－. 東京: 新曜社 1994.
- 8) 船橋邦子. 家族のなかのジェンダー問題. 家族看護学研究 2001; 6(2): 142-6.
- 9) 鈴木淳子. ジェンダー役割不平等のメカニズム. 心理学評論 2017; 60(1): 62-80.
- 10) 一般社団法人回復期リハビリテーション病棟協会 (<http://www.rehabili.jp>) 2018.8.1.
- 11) 千葉京子, 中村美鈴, 長江弘子. 大腿骨頸部骨折術後高齢者が「生活の折り合い」に向かう心理的過程－退院1週間前から退院1ヶ月後までの経過－. 日本看護研究学会雑誌 2003; 26(5): 73-86.
- 12) 北村隆子, 畑野相子, 安田千寿, 他. 大腿骨頸部骨折を経験した高齢者の退院後の生活活発度に関する研究－退院1ヶ月後の生活状況調査結果－. 人間看護学研究 2009; 7: 91-5.
- 13) 安田千寿, 北村隆子, 畑野相子. 大腿骨骨折治療を受けた高齢患者の1年間の生活状況－生活の再構築と看護師との関わりにおける事例検討－人間看護学研究 2011; 9: 55-60.
- 14) 厚生労働省. 医療ソーシャルワーカー業務指針 2002.
- 15) 畑香理. 大腿骨骨折患者の支援における医療ソーシャルワーカーの役割に関する一考察－回復期リハビリテーション病棟へのアンケート調査から－. 医療と福祉 2019; 106(53): 56-62.
- 16) 畑香理. 高齢の大腿骨骨折患者に対する支援の現状－男女別, 経験年数別にみた医療ソーシャルワーカーの支援状況の差異－. 地域ケアリング 2019; 21(12): 53-7.
- 17) 野辺政雄. 高齢者の社会的ネットワークとソーシャル・サポートの性別による違いについて. 社会学評論 1999; 50(3): 375-92.
- 18) 総務省. 平成28年社会生活基本調査 2017.
- 19) 厚生省. 厚生白書平成10年版 1998.
- 20) 松田茂樹. 性別役割分業と新・性別役割分業－仕事と家事の二重負担－. 現代日本の夫婦関係 2001: 39-57.